

## 18. 中国新疆ウイグルのカレーズ（４）－火炎山麓にみるカレーズの原型－

写真1にあるように、今回の話題の中心においている火炎山はトルファン盆地の北東部にあつて、その盆地を南北に分断するように平野面から突き出している。撓曲性の低山で、標高は300mから700m、東西の延長距離は70km、南北の幅は5～6km程度と、写真2に見るように全体として平頂な丘陵地状の地貌を呈する。

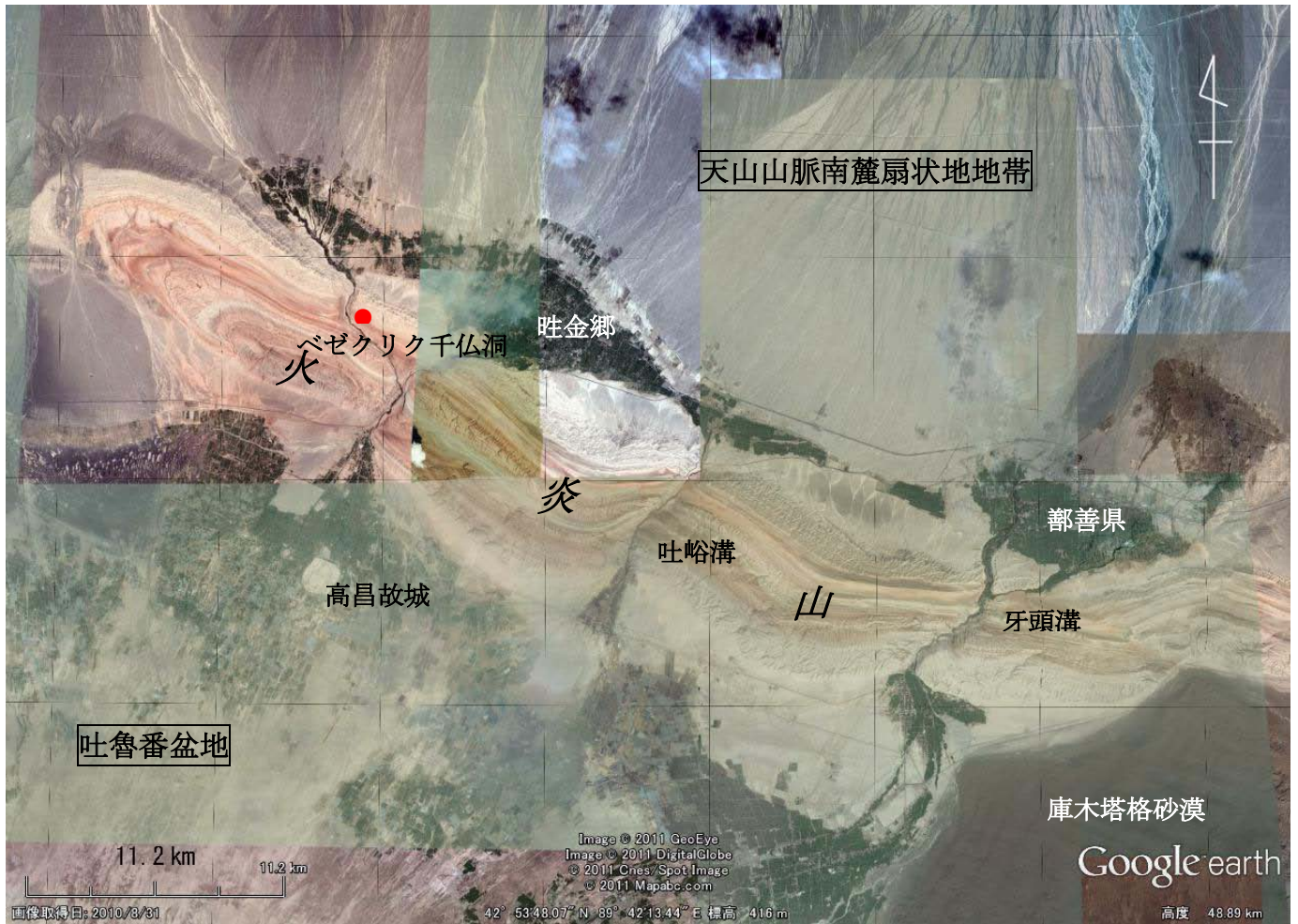


写真1 トルファン盆地と火炎山

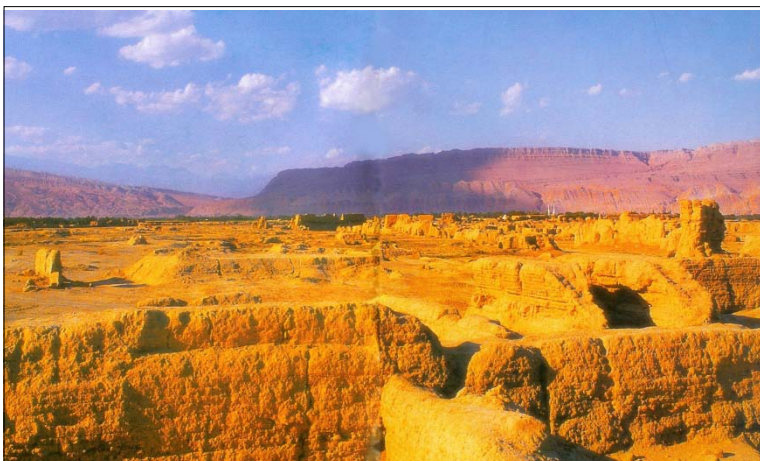


写真2 高昌故城からみた火炎山

火炎山には写真1にみるように、これを横断する複数の狭窄部があり、それぞれ峡谷をつくっている。その溪谷の入り口と出口の比高は300m以上で、溪流は急流となってトルファン盆地に流れ出している。ベゼクリク千仏洞や吐峪溝千仏洞などの仏教遺跡はその岸壁に造られている。この辺りは古来より交通の要衝であり、文物の往来も多く、また支配民族の興亡も激しかったところでもある。写真2の前方にみえる山が火炎山で、その狭窄部にベゼクリク千仏洞がある。



写真3 火炎山

なお火炎山とは夕刻になって山腹に西日があたるようになると、写真3のように山全体が真っ赤に染まり、山麓が炎のようにみえることからついた名である。ちなみにこの辺りは古来“火州”と呼ばれており、西遊記の舞台として有名なのはご存じの方が多いと思う。唐の時代、三蔵法師が経典を求めて西に向かった折に立ち寄ったと言われている高昌故城はこの近くにある（写真1）。

写真1をよく見ると火炎山の南北両山麓に緑地帯が集中しているのが指摘できる。これらは、最近まではその殆どがカレーズによって灌漑されていた地域であったが現在は天山山地から流れ出す河水から取水する開渠による灌漑にとって代えられようとしている。その様子は図1から読み取ることができる。これは2004年に作成された「新疆维吾尔自治区坎儿井分布図」の一部を切り出したもので、ほぼ写真1の範囲に対応している。ここで赤線は枯渇して放棄されたカレーズ、青線は修復によって再生が見込まれるカレーズ、緑線は現在も生きているカレーズである。それらの中で、これから話題にしようとしている畦金（シンギム）郷地域のカレーズの殆どが枯渇しているのが注目される。

この地域のカレーズの水系には2種類あって、一つは水源が天山山脈前面の扇状地にあり、北から南へと流れているもの、他は図では点にしか表現されていないが、火炎山の麓に水源があって南から北へ流れているもので、その多くは数100m以内と、短いのが特徴である。

図1の東西を横切る道は天山南路と呼ばれ、その沿線には、吐峪溝千仏洞、柏孜克里克（ベゼクリク）千仏洞、高昌故城、交河故城などの遺跡が並んでいる。なお高昌国は漢代に軍事拠点として築かれたのが始まりで、最盛期には人口3万人、僧侶3千人が居住していたという。ここは新疆東部の政治・経済・文化の中心地として栄え、5万人が住んでいたという資料もある。漢代以後、新疆東部地域が涼王朝、唐王朝、回鶻汗国と続く王朝の支配の下にあった間、その中心として存続した。

筆者の仮説であるが、これらの時代を通してベゼクリク千仏洞のある狭窄部は匈奴などの北方騎馬民族の侵入を防ぐための重要な拠点であり続け、火炎山北麓に広がる台地部は多分漢代に屯田兵が開いた土地だと思っている。ここには後述の古い烽火（のろし）台の遺跡があり（写真4）、また耕作地、墓地などの遺構、さらには砦様の遺構が各所

にみられるからである。さらに加えれば、その台地前面の河流沿いの低地は、当時は湿地あるいは沼地であり、外敵の侵入を防御するうえで重要な役割を担っていたものと思われる。なおこの地帯は地下水位が高く、現在でも自噴井が存在するところもある。このような背景を考えることによって、上記の各種遺構や以下に述べるカレーズなどの水利施設の位置付けが説明しやすくなる。

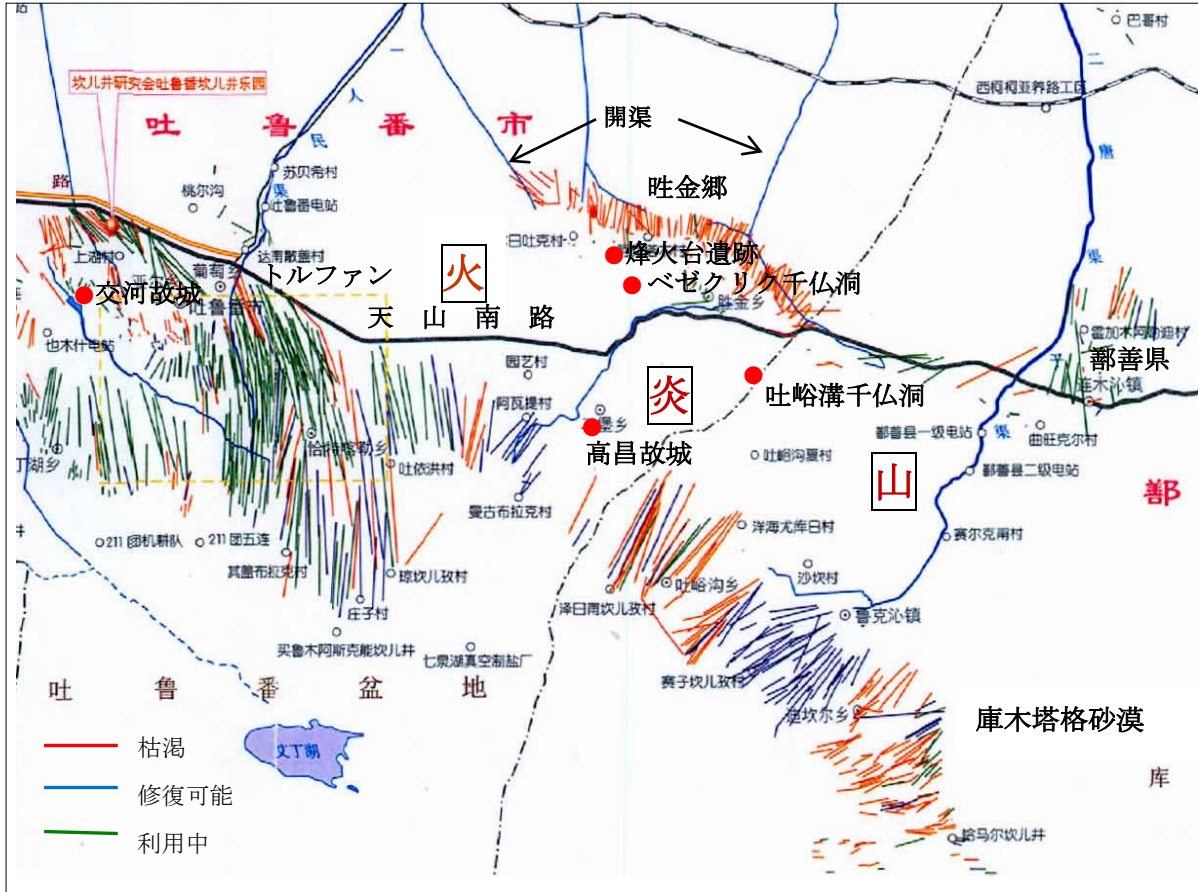


図1 火炎山周辺のカレーズの分布図



写真4 古代烽火台の遺跡（1,500年前のものとしてされている）

以下写真5によって、これらのことについて考察する。

- ① 緑色で塗色した地域は火炎山の麓に広がる台地で、ここには古代耕作地の遺構が各所にみられる。つまりこのあたりがかつての生活の主な場であった。
- ② これらの耕作地は、はじめ火炎山から流れ出す表流水や山麓部に湧き出す湧水に依存していたが、地下水位の低下とともに、それまでの耕作地は放棄され、下流側に移動するようになった(写真6)。また谷沿いに堅穴を掘り、これを横につなげて下流側に導水する技術も取得した(写真6, 7)。つまりカレーズの原型である。
- ③ 経験を積み重ねた古代人は、斜面に対して横並びに堅穴群を配置することによってより多量の水量を得ることができることを知った(写真8)。

なおこのあたりの地名、霍加木布拉克(フジャムブラク)の“フジャム”はウイグル族の人名で、多分“村おさ”といった地位のある人を指したものであろう。また“ブラク”とは“水のあるところ”の意味である(注1)。



写真5 火炎山北麓(畦金(シンギム)郷付近)

注1) 「霍」は「胡」と書く場合もある。ウイグル語の発音をそれに近い発音の漢字で置き換えたもので、これには全く意味はない。

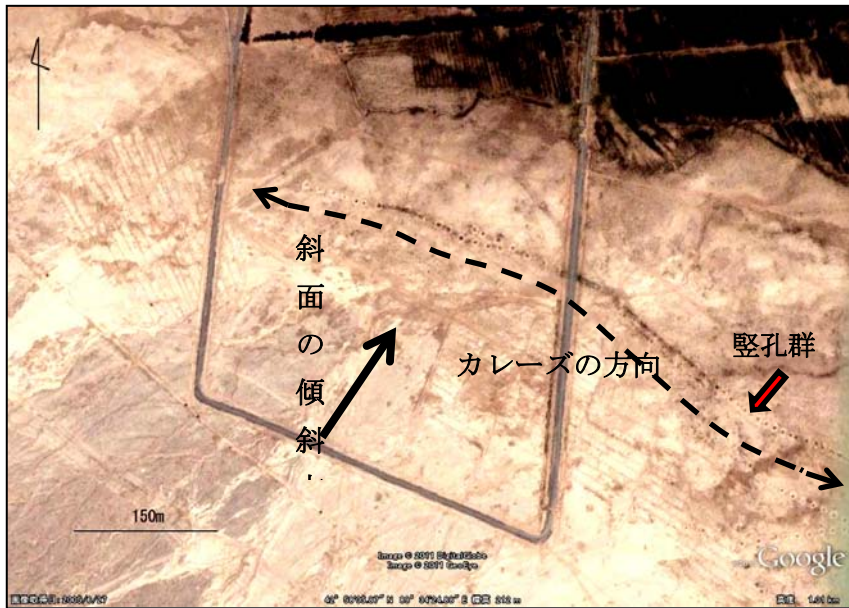


写真6 耕作地の移動とカレーズの配置 (畦金 (シンギム) 郷、木頭溝 (ムルトウク) 村)



写真7 谷に沿って掘られたカレーズ  
(無数の小さなマウンドは墓地遺跡)

カレーズの堅孔が谷に沿って掘られているのは地形的に低いところに地下水が集まるからである。ただし谷中ではなく、これからやや離れた高いところに、並行して掘られているのは出水時の濁水がこれに流れ込んで、土砂で埋められないための配慮である。なおカレーズが放棄された耕作地を横切って造られていることからカレーズは耕作地の放棄後につくられたものと判断される。



斜面の傾斜方向に直行するタイプのカレーズはこの地域に数カ所あり、「吐格拉坎儿井」と呼ばれている。なお吐格拉(トグル)とはウイグル語で“横向き”の意味である。

写真8 斜面に対して横並びに配置された豎孔群  
(位置は写真5 参照)

さて新疆ウイグル自治区のカレーズの集大成ともいべき「新疆坎儿井」(新疆坎儿井研究会編, 新疆出版社発行, 2006)では、写真5に示した霍加木布拉克(フジャムブラク)地区のカレーズについて、霍加木布拉克坎儿井と名付け、「開口部の位置: 北緯42° 58.880' 東経89° 30.984' 総延長: 300m, 豎井総数: 12眼, 主部井深: 7m, 2003年時の水量: 21/sec」と記載している。またこれとは別にウイグル語で書かれた「新疆カレーズ」(新疆ウイグル自治区カレーズ研究会, 新疆出版社, 2006)では、「新たに発見されたカレーズはベゼクリク千仏洞から北に2.8 km行った西の火炎山の谷中にある。道路からわずか400mほどだからすぐに見つけることができる。遺跡の入り口に[5つの谷の千仏洞]と書いた石碑があり、そこからフジャムブラクの集落を遠望することができる(写真9)。その地点から左600mのところ、1,500年前に造られたフジャムブラク塔があり(写真4)、フジャムブラク坎儿井は、ここから150mほどのところにある。」

との記述がある。

これらの記述を手掛かりに現地を歩き回った結果、写真10にあるカレーズに到達することができた。これについて、やや詳しく述べることにする。

前方は墓地でその右端にモスクが見える。その先の緑は旌金(シンギム)郷。さらにその背後には天山山脈の山々が翳んでみえる。



写真9 火炎山北麓の台地から北方を望む



写真10 探し当てたカレーズ (フジャムブラク坎児井)

図2の概略図にあるように、カレーズは2本あり、①としたものが上記文献にあるもので、現在も水流がみられるが、②としたものは痕跡だけである。「吐魯番坎児井」(新疆大学出版社, 1993)の中で、吐尔(トル)坎児井、つまり“烽火台の傍にあるカレーズ”と記載されているものと同じで、畦金(シンギム)郷地域に他に2箇所存在する。

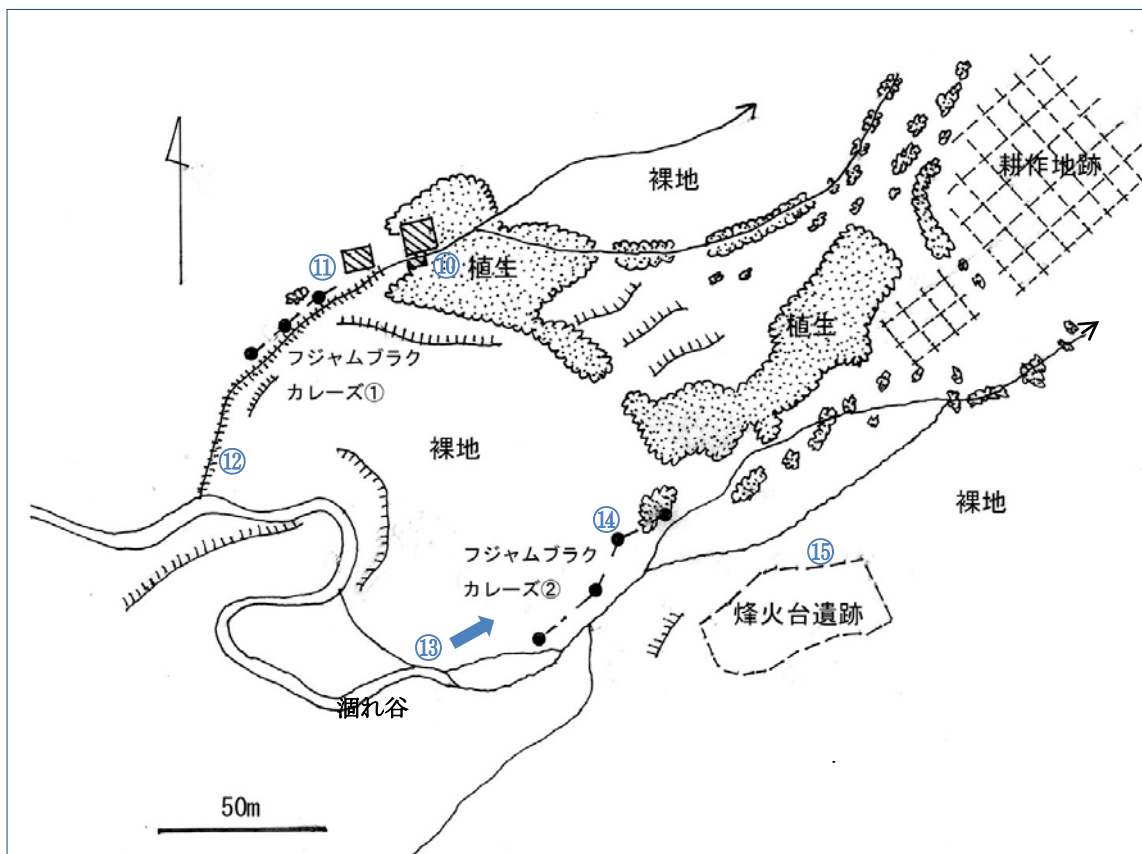


図2 フジャムブラク坎児井近傍略図

(数字は本文の写真番号に対応する)



写真 11 谷筋の脇に掘られたカレズの豎孔①

(豎孔の深さは首部で約7m。谷の底より5mほど低い。前方の木の生えているところがカレズの出口)



写真 12 源流域の様子



写真 13 隣接する谷沿いのカレズ②

(道案内のウイグルの子供たち)



写真 14 谷筋の脇に掘られた豎孔

(烽火台遺跡はこの下流にある)



写真 15 古代烽火台の遺跡

(写真4に同じ、藁と木材を補強材として築かれている)



このカレーズが 1,500 年前に造られたとされる烽火台と同じ時代のものかどうかを直接証拠づけるものはないが、ここにある烽火台は図 2 にあるように、それだけにしては大きすぎる規模なので、砦の役割も担っていたのではないかと思われる。だとすればその為の十分な量の水の確保は不可欠であり、両者は同時代のものとするのが素直な解釈である。

今回は現地調査から漏れてしまったが、その後、近傍の地区に写真 16 にあるように、カレーズと堡壘様の遺跡との密接な関係を示す画像を得て上記の仮説の妥当性が裏打ちされた。

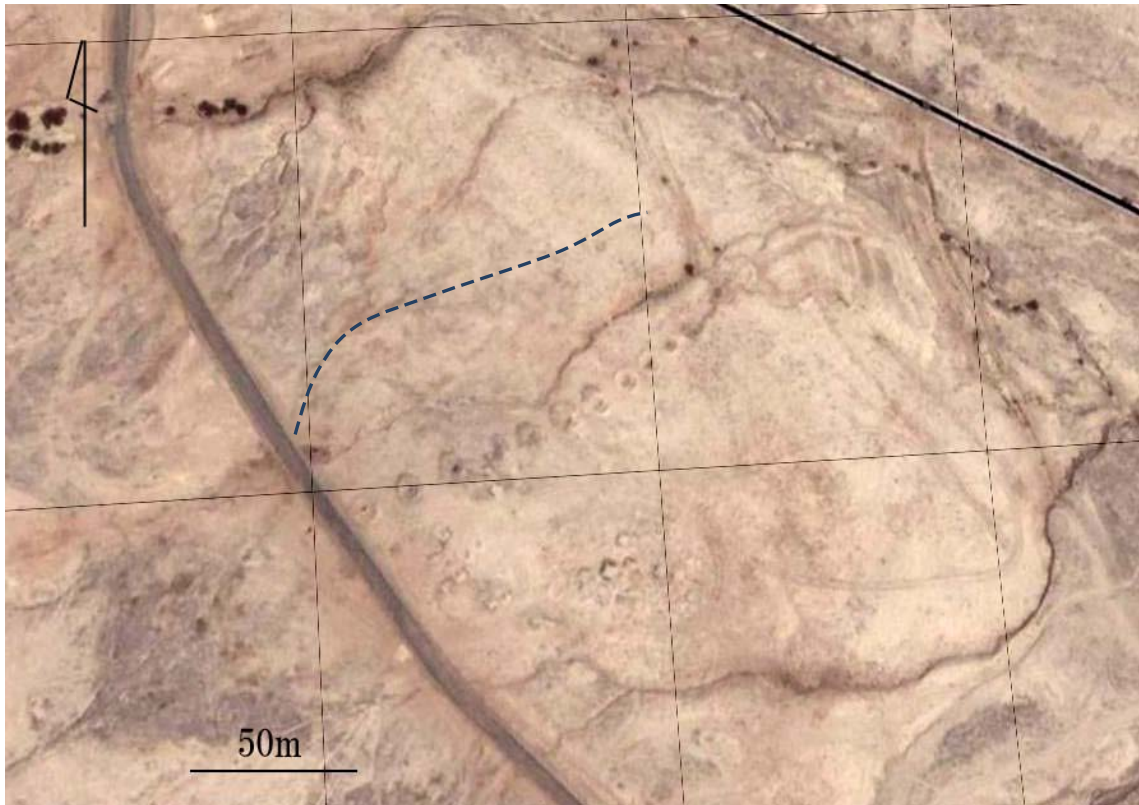


写真 16 堡壘様の遺跡とカレーズ(上の破線はさらに古いカレーズ?)



写真 17 浚渫土砂の巻き上げ器

先にも述べたようにフジャムブラク 坎児井①は永年を経た現在もなお健在である。営々と続けられてきた保守管理がそれを支えている。写真 17 はそれを物語る浚渫土砂を巻き上げるためのもので、カレーズの傍に置いてあった。

新疆ウイグルのカレーズの話はここでひとまず終わることにするが、今後機会を得て、この続きが書ける調査ができれば有難いと思っている。